

会員のば

野生の王国

札幌市医師会
岡本病院

種田 雅彦

別にアフリカなどのことではなく、私の「生息」している札幌市郊外の話である。

場所柄、よく道道341号真駒内御料札幌線（別名：厚別滝野公園通）を車で利用する。札幌市南区と厚別区を結ぶ道路で、大半が町中を通らず信号があまりないため快適に走れるし、滝野すずらん丘陵公園、真駒内滝野霊園、札幌ふれあいの森といった自然豊かな施設に気軽に立ち寄れるので、頻繁に通っている。

そんな郊外の道路だが、ここ2～3年少し様子が変わってきている。走るたびにかなりの頻度でさまざまな動物に遭遇するようになったのだ。以前はたまに狐の姿を一瞬見るぐらいで、まず動物を見かけることはなかった。ところが、最近は日中夜間を問わず本当によく見かけるようになった。

一番驚かされるのが鹿（エゾシカ）だ。群れ（恐らく家族）で道路を堂々と横切る。畑の作物が狙いなのか、川で水を飲むのが目的なのか。冬のある日、車と衝突したと思われる鹿の死体が横たわっているのに出くわしたことがあった。急に飛び出したために避けきれずに轢かれてしまったのだろう。この鹿は立派な角のある大きな雄だった。

私自身も初夏にあわや衝突ということがあった。夜の9時頃、少し見通しの悪いカーブを曲がりきったところに一頭の小鹿がたたずんでいた。用心してスピードをさほど出さずに走行していたので、直前で止まれて事なきを得たが。その小鹿はしばらくキョトンとこちらを見つめていた後、ゆっくりと草むらに消えていった。きっと親鹿がどこかで待っているはず。轢かずに済んでよかったと胸をなでおろしたものだ。それにしても鹿は音や光に対して意外に無頓着だ。慌てて逃げようとはせず、こちらが呆れるほどのマイペース。

次に狸（エゾタヌキ）。最近よく見かけるようになった。道路に飛び出してきた後、道路脇に逃げるかと思いきや、車の前を一緒になってしばらくダッ

シュし、そのうち茂みに入っていく。大体が丸々と太っているので、トコトコというよりポヨンポヨンという感じで懸命に走っていく。何とも可愛らしいのだが、轢いてしまわないか冷や冷やものだ。

狐（キタキツネ）は用心深いのか、せいぜい道路脇にひっそりと姿を現し、こちらの様子をうかがっている。あまり飛び出してくることはない。観察してみようと車を傍らに寄せても、逃げずに「何か用？」といった表情で見返してくる。そのほか、急に横切るリス（エゾリス、エゾシマリス）、集団でたむろするアライグマなどをしばしば見る。幸いまだ熊（ヒグマ）には出合っていない。もちろん合いたくないが、今年になって南区の住宅地や滝野すずらん丘陵公園に出没するようになっていっているので、早晚出くわすのではと危惧している。

道内各地では動物との遭遇など日常茶飯事だと思う。北海道全体が野生の王国と言ってもよいくらいなので、何を今さらとお叱りを受けそうだ。ただ、札幌周辺（南部の郊外に限ったことかもしれないが…）では動物環境に少なからず変化が出ていると感じられるのだ。個体数が増えているといった単純なものではない気がする。人間と動物の距離の変化、関わり方の変化みたいなものがありそうに思える。

今までは彼らの領域にわれわれが進出していった。その中で彼らは生き抜いていくため、彼らなりに生活・行動様式を変えて人間側に近づいてきている。人間の作った作物や捨てた食糧を頂戴する、人間の建設した構造物を利用するなど。その結果、遭遇する機会が増加しているようだ。生態系が少しずつ、でも確実に変化してきているを感じる。

動物側の変化は環境に対する学習と適応なのだろう。しかし、それはもしかすると人間との関わりに端を発した動物の進化の一過程ではないか、そして人間が進化のきっかけを与えているのではないか、などと私は少々大袈裟に考え始めている。もちろん今は検証する術もないが。

発想を飛躍させてしまうのはこれくらいにして、また野生の王国の中の自然豊かな道を走ることにしよう。ただし、動物の命を奪うことのないよう運転は慎重にして。

